

ヨハネの福音書(1) ヨハ1:1~18

1. はじめに

(1) 本書が与えられていることの祝福

- ①神は、ヨハネを用いて、深遠な霊的真理を啓示された。
- ②それゆえ、一言一句も見逃してはならない。
- ③マタイ、マルコ、ルカは共観福音書と呼ばれる。
 - *地から天を見上げるという視点で書かれている。
 - *キリストの生涯の出来事について記録している。
- ④ヨハネの福音書は、第4福音書と呼ばれる。
 - *天から地を見下ろすという視点で書かれている。
 - *キリストの生涯の出来事の霊的意味について解説している。
 - *「奇跡」ではなく、「しるし」ということばを使っている。

(2) 前書きの内容は、神学的なものである。

- ①ヨハネは、イエスと永遠の神の関係を強調している。
- ②イエスは、神の子が人となられたお方である。
- ③イエスは、罪人に永遠のいのちを与えるために来られた。

2. アウトライン

- (1) 受肉前のことば(1~5節)
- (2) バプテスマのヨハネの証言(6~8節)
- (3) まことの光の到来(9~13節)
- (4) ことばの受肉(14~18節)

ヨハネの福音書の前書きについて学ぶ。

I. 受肉前のことば(1~5節)

1. 1節

Joh 1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

- (1) 「初めにことばがあった」
 - ①創世記1章1節の「はじめに」よりも前に遡る。
 - ②「初めに」とは、被造物が何も存在しなかったときのことである。
 - ③「ことば」は、永遠の昔から存在しておられた。
- (2) 「ことば」は、ギリシア語で「ロゴス」、アラム語で「メムラ」である。
 - ①タルグム(旧約聖書のアラム語訳)では、神を「メムラ」と訳している。

- ②ヨハネは、「メムラ」ということばをギリシア語の「ロゴス」と訳した。
- ③1節後半で、ヨハネは、「ことばは神であった」と宣言する。
- ④「ことば」は神であるだけでなく、神の本質の表現でもある。
 - *「ことば」は、神が人類に知らせたいと思っておられることを表現する。

(3) 「ことばは神とともにあった。ことばは神であった」

- ①「ことば」は、神とは区別されるお方である。
- ②と同時に、「ことば」は、神である。
- ③聖書の神が三位一体の神であることが啓示されている。
- ④子なる神は、父なる神や聖霊なる神とは区別されるお方である。

(4) イエスとは誰か。

- ①ユダヤ人にとっては、イエスは神だというのは、神への冒瀆である。
- ②ギリシア人にとっては、神が人となられたというのはいかなる事でもあり得ないこと。
- ③信じる者にとっては、神が人となられたというの、福音である。

2. 2~3節

Joh 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

Joh 1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。

- (1) 「この方は、初めに神とともにおられた」
 - ①「ことば」は神になったのではなく、初めから神である。
- (2) 今存在しているもので、「ことば」が創造しなかったものはひとつもない。
 - ①「ことば」は、父なる神の御心に従って創造のわざに参加された。
 - ②宇宙は、三位一体の神の作品として、「神の栄光」を表している。
 - ③大自然の中に神の栄光を見る人は、幸いである。

3. 4~5節

Joh 1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

Joh 1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

- (1) ヨハネの福音書のメインテーマは、「イエスは神の子」というものである。
 - ①サブテーマと呼ばれるものが、いくつかある。
 - ②「光と闇の戦い」、「信仰と不信仰」など。
 - ③闇に打ち勝つ光とは、人となられた「ことば」のことである。
 - ④このお方に、人類の希望がかかっている。

⑤創造主であるお方は、私たちが抱えるいかなる問題よりも大きい。

⑥イエスに従う者は、闇の中でつまづくことはない。

(2) ヨハネは、光と闇の戦いを、肯定文と否定文で表現している。

①光の勝利は、十字架の死によってもたされる。

②6節に入ると、ヨハネが神から遣わされた人として紹介される。

③しかし、彼は光ではなく、光について証言するために遣わされた人である。

II. バプテスマのヨハネの証言(6~8節)

1. 6節

Joh 1:6 神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。

(1) バプテスマのヨハネは、闇の世界に光を紹介した人である。

①彼は、神から遣わされた人である。

②彼は、旧約聖書の系譜に属する預言者である。

③彼は人であるが、「ことば」は神である。

④彼は、メシアの先駆者である。

⑤彼は、奉仕者のモデルである。

(2) 使徒ヨハネは、バプテスマのヨハネとは言わないで、単にヨハネという。

①自分のことは、「イエスが愛された弟子」(ヨハ21:20)と呼ぶ。

2. 7~8節

Joh 1:7 この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。

Joh 1:8 彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。

(1) ヨハネが遣わされた目的は、「光について証しするため」であった。

①強調点がくり返される。「証しするために来た」

②彼が奉仕者のモデルである理由は、この点にある。

③奉仕者の使命は、キリストを証しすることである。

(2) その結果、すべての人が信じるためであった。

①これは、使徒ヨハネがこの福音書を書いた目的でもある。

III. まことの光の到来(9~13節)

1. 9節

Joh 1:9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。

(1) この聖句は、「ことば」の受肉を意味している。

- ①「すべての人を照らす」とは、普遍的救いのことではない。
- ②「世」とは、悪魔の支配下にある罪の世である。
- ③イエスは、信じる人に救いをもたらす。
- ④イエスは、罪について、裁きについて、人に教える。

2. 10~11節

Joh 1:10 この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。

Joh 1:11 この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

(1) 人々は、この方を知らなかった。

- ①人々は、悪魔の支配下にあり、靈的に盲目である。
- ②それゆえ、この方が創造主であることを認識できない。
- ③ヨハ12:37

Joh 12:37 イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。

(2) 契約の民イスラエルでさえも、この方を受け入れなかった。

- ①彼らは、この方が神から送られた啓示であることを拒否した。
- ②彼らは、この方の教えに敵対した。

3. 12~13節

Joh 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

Joh 1:13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

(1) しかし、不信仰は普遍的な現象ではなかった。

- ①この方を信じる人々も出た。
- ②彼らは、「その名を信じた」ので、救われた。
*イエスの本質(救い主であること)を信じた。
- ③救いとは、神の子どもとなる特権を与えられることである。
- ④人は、信仰による新生体験を経て、神の子どもとされる。

(2) 新生体験はどのようにして可能になるのか。

- ①血統によるのではない。

*親の信仰によって子どもが救われるわけではない。

②本人の意志の力によるのでもない。

*同意することは必要である。

③他者の意志の力によるのでもない。

*説教者が人を救えるわけではない。

④聖霊の働きによって、人は新生する。

*伝道する際には、聖霊が働いてくださるように祈る必要がある。

IV. ことばの受肉(14~18節)

1. 14節

Joh 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

- (1) 神が、目に見える形でご自分を啓示される場合がある。
 - ①キリスト教神学では、この現象を「神の顕現(theophany)」と呼ぶ。
 - ②ユダヤ教のラビたちは、同じ現象をヘブル語で「シャカイナ」と呼ぶ。
 - *神の顕現は、栄光の光を伴っていることが多い。
 - *「シャカイナグローリー」ということばが用いられるようになった。
- (2) 旧約では、シャカイナグローリーは、光、火、雲などとして現れている。
 - ①出40章では、至聖所にシャカイナグローリーが宿った。
 - ②この時以来、神はイスラエルの民の間に宿られた。
 - ③シャカイナグローリーは、その現れである。
 - ④ところが、エゼ8~11章で、そのシャカイナグローリーが神殿を去った。
 - ⑤イエスの誕生まで、シャカイナグローリーが民の間に宿ることはなかった。
- (3) イエスの誕生とともにシャカイナグローリーが戻って来た。
 - ①「住まわれた」は、スケイネイというギリシア語である。
 - ②直訳すると、「幕屋を張られた」となる。
 - ③イエスの肉体の内にシャカイナグローリーが宿ったのである。
 - ④この光は、肉体によってさえぎられ、外に輝き出すことはなかった。
 - ⑤人間イエスが、通常のユダヤ人男性と同じ姿であったのはそのためである。
 - ⑥例外的に、その栄光が輝き出したことがあった。
 - *3人(ペテロ、ヤコブ、ヨハネ)が、山の上でそれを目撃した。
 - *「私たちはこの方の栄光を見た」とは、変貌山の体験への言及である。

2. 15節

Joh 1:15 ヨハネはこの方について証しして、こう叫んだ。「『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」

(1) ヨハネの証言

- ① イエスは、ヨハネの後に来られる方である。
* ヨハネのほうがかつて早く誕生し、イエスの先駆者となった。
- ② イエスは、ヨハネにまさる方である。
* イエスは、ヨハネよりも先におられた。
* イエスの永遠性が確認されている。

3. 16~17節

Joh 1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。

Joh 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

(1) 「律法の時代」は、シナイ契約が土台になっていた時代である。

- ① シナイ契約は、シャカイナグローリーの中で結ばれた(出24:1~11)。
- ② 律法は、モーセを仲介者として与えられた。

(2) 「恵みの時代」は、新しい契約(新約)が土台になる時代である。

- ① 新しい契約は、イエスが血潮を流すことによって結ばれるものである。
- ② この真理を詳細に教えているのが、ヘブ8~10章である。
- ③ イエスをメシアと信じることは、新しい契約にサインをすることである。
- ④ イエスを信じた者は、神との契約関係に入ったのである。
- ⑤ それゆえに私たちは、大胆に神の栄光の御座に近づくことができる。

4. 18節

Joh 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

(1) いまだかつて神を見た者はいない。

- ① シャカイナグローリーや【主】の使いを見ても、神を見たことにはならない。
- ② それらは、神が人に語りかけるために選ばれた一時的な方法である。

(2) イエスは、神を解き明かされた。

- ① イエスは、ひとり子の神である。
- ② イエスを見た者は、神を見たのである。

③イエスの教えを聞いた者は、神の心を聞いたのである。

④イエスを知ることは、神の愛と計画を知ることである。

⑤ヨハ14:9

Joh 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」

結論

1. 情報の洪水

(1) 入院と退院後の後遺症の苦しみ

(2) しばらくの間、情報収集から遠ざかっていた。

(3) 現代人の3つの恐れ

①時代遅れになる恐れ

②「ノイズ」なのか「本質的なこと」なのか見分けがつかない恐れ

③「偽情報」なのか「真実」なのか見分けがつかない恐れ

2. 解決策

(1) イエスを見た人は、神を見たのである。

(2) イエスを信じた人は、真理を知ったのである。

(3) イエスを信じた人は、光の中を歩んでいるのである。

(4) 「情報」は、三歩遅れでフォローすればよい。

ヨハネの福音書(2)

「公生涯への序曲」ーイエスに従った5人の型ー

ヨハ1:19~51

1. はじめに

(1) 前書きの内容は、神学的なものである。

- ① イエスは、神である。
- ② イエスは、神の子が人となられたお方である。
- ③ イエスは、罪人に永遠のいのちを与えるために来られた。

(2) 文脈の確認

- ① 前書き(1:1~18)
- ② イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - * 公生涯への序曲(1:19~51)

2. アウトライン

- (1) ヨハネの婉曲的証し(19~28節)
- (2) ヨハネの直接的証し(29~34節)
- (3) 証しへの応答(35~42節)
- (4) 証しの広がり(42~51節)

公生涯への序曲について学ぶ。

I. ヨハネの婉曲的証し(19~28節)

1. 19~20節

Joh 1:19 さて、ヨハネの証しはこうである。ユダヤ人たちが、祭司たちとレビ人たちをエルサレムから遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねたとき、

Joh 1:20 ヨハネはためらうことなく告白し、「私はキリストではありません」と明言した。

- (1) ユダヤ人たちが、祭司たちとレビ人たちをエルサレムから遣わした。
 - ① ここでの「ユダヤ人たち」とは、ユダヤの住民たちである。
 - ② サンヘドリンは、ローマ公認の自治組織(司法、行政、立法機関)である。
 - * 70名の議員と1名の議長(大祭司)から成る。
 - * 祭司长(サドカイ派)、律法学者(パリサイ派)、長老(一般人の代表)
 - ③ サンヘドリンは、ヨハネが指導している神の国運動を無視できなくなった。
 - * エルサレムから派遣されたことが、3度も出てくる(19、22、24節)。

(2) 審問と回答

- ①「あなたはどなたですか」
- ②「私はキリストではありません」

2. 21~24

Joh 1:21 彼らはヨハネに尋ねた。「それでは、何者なのですか。あなたはエリヤですか。」ヨハネは「違います」と言った。「では、あの預言者ですか。」ヨハネは「違います」と答えた。

Joh 1:22 それで、彼らはヨハネに言った。「あなたはだれですか。私たちが遣わした人たちに返事を伝えたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」

Joh 1:23 ヨハネは言った。「私は、預言者イザヤが言った、『主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声』です。」

Joh 1:24 彼らは、パリサイ人から遣わされて来ていた。

(1) 審問と回答

- ①「あなたはエリヤですか」(マラ4:5の預言)。
- ②「違います」
- ③「では、あの預言者ですか」(申18:15の預言)
- ④「違います」
- ⑤「あなたは自分を何だと言われるのですか」
- ⑥ヨハネは自分を、「荒野で叫ぶ者の声」として紹介した(イザ40:3)。
*ヨハネは「声」であり、イエスは「ことば」である。
*ヨハネは、メシアの先駆者としての自分の使命をよく理解していた。

3. 25~27節

Joh 1:25 彼らはヨハネに尋ねた。「キリストでもなく、エリヤでもなく、あの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」

Joh 1:26 ヨハネは彼らに答えた。「私は水でバプテスマを授けていますが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。」

Joh 1:27 その方は私の後に来られる方で、私にはその方の履き物のひもを解く値打ちもありません。」

(1) 審問と回答

- ①無資格の身でありながら、なぜバプテスマを授けているのか。
- ②水でバプテスマを授けているのは、メシアが現れるための準備である。
- ③メシアと比較すると、自分は奴隷以下の存在だ。

4. 28節

Joh 1:28 このことがあったのは、ヨルダンの川向こうのベタニアであった。ヨハネはそこでバプテスマを授けていたのである。

- (1) 「ヨルダンの川向こうのベタニア」
 - ①ユダのベタニアとは異なる場所である。
 - ②霊的覚醒は、辺境の地から始まる。

II. ヨハネの直接的証し (29~34 節)

1. 29~31 節

Joh 1:29 その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」

Joh 1:30 『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。

Joh 1:31 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。」

- (1) テンポの速い展開
 - ①「その翌日」 (29、35、43 節)
 - ②「それから三日目に」 (2 章 1 節)
 - ③およそ 1 週間後に、イエスと弟子たちはカナの婚礼に参列することになる。

- (2) 「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」
 - ①紀元 1 世紀のユダヤ人たちは、「子羊」について 2 つの概念を持っていた。
 - * 過ぎ越しの子羊という概念 (出 12 章)
 - * メシア的の子羊という概念 (イザ 53 章)
 - ②ヨハネは両方の意味で、イエスを「神の子羊」と呼んだ。

- (3) 「その方は私にまさる方です。私より先におられたからです」
 - ①イエスは人間としては、ヨハネよりも 6 か月後に誕生した。
 - ②しかし、神の子としては、宇宙が創造される前から存在しておられた。
 - ③イエスは人間性と神性の両方を持たれた。

2. 32~34 節

Joh 1:32 そして、ヨハネはこのように証しした。「御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。」

Joh 1:33 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。』

Joh 1:34 私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。」

- (1) ヨハネは、イエスがヨハネから洗礼を受けたことを前提に書いている。
 - ①イエスの上に御霊が鳩のように天から下るのを見た。
 - ②「それで、この方が神の子であると証しをしているのです」

III. 証しへの応答 (35~42 節)

1. 35~37 節

Joh 1:35 その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。

Joh 1:36 そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の子羊」と言った。

Joh 1:37 二人の弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。

- (1) イエスの最初の弟子たちは、バプテスマのヨハネの弟子たちであった。
 - ①「二人の弟子」とは、アンデレと本書の著者ヨハネである。
 - ②2人はイエスについて行った(ヨハネの証しへの応答)。
 - ③バプテスマのヨハネは、自分の弟子を失うことになる。
 - ④彼の使命は、メシアを指し示すことである。

2. 38~40 節

Joh 1:38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ(訳すと、先生)、どこにお泊りですか。」

Joh 1:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすれば分かります。」そこで、彼らがついて行って、イエスが泊まっておられるところを見た。そしてその日、イエスのもとにとどまった。時はおよそ第十の時であった。

Joh 1:40 ヨハネから聞いてイエスについて行った二人のうちの一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。

- (1) ラビが弟子を取るときのユダヤ的習慣
 - ①志願者は、ラビの教えに耳を傾けながら、距離を置いてその後に付いて行く。
 - ②ラビが、「何を求めているのか(誰を探しているのか)」と質問する。
 - ③志願者は、「ラビ。どこにお泊りですか(お住まいですか)」と問いかける。
 - ④「お前と何の関係があるのか」は、断りのことばである。
 - ⑤「来なさい。そうすれば分かります」は、承認のことばである。

- (2) この日、アンデレとヨハネは、イエスをメシアと信じた。

- ①「時はおよそ第十の時であった」

*ユダヤ式時間では、午前6時から数えて第10時。午後4時。

*ローマ式時間では、午前0時から数えて第10時。午前10時。

*恐らく午前10時であろう(ヨハネの福音書はエペソで執筆された)。

②彼らは、イエスと親しく話し合った。

*その内容は、旧約聖書(律法と預言者)のメシア預言であろう。

3. 41~42節

Joh 1:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った」と言った。

Joh 1:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンを見つめて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたはケファ(言い換えれば、ペテロ)と呼ばれます。」

(1) 「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、」

①何をするよりも先に自分の兄弟シモンを見つけてという解釈が多い。

②別の解釈も可能である(ギリシア語のプロトス)。

*ヨハネも兄弟を探したが、アンデレの方が先に自分の兄弟を見つけた。

(2) 「私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った」

①ユダヤ人が長年夢に描いてきたことが実現した。

②これまで師であったバプテスマのヨハネが、この方を指し示した。

③私とヨハネは、そのお方のそばに座り、心ゆくまでその教えに耳を傾けた。

④アンデレは、ペテロをイエスのもとに連れて来た。

(3) イエスの応答

①シモンに目を留めた。その本質を見極めた。

②シモンの名を呼んだ。「ヨハネの子シモン」(バル・ヨハネ・シモン)。

③シモンに新しい名を与えた。

*「ケファ」はアラム語で岩という意味。

*ギリシア語では「ペテロ」(ペテロス)。これもまた岩という意味。

IV. 証しの広がり(43~51節)

1. 43~44節

Joh 1:43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて、「わたしに従って来なさい」と言われた。

Joh 1:44 彼はベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。

(1) ガリラヤに帰ろうとされた時に、ピリポを見つけた。

①今度は、イエスがピリポを招いた。ユダヤ教の習慣にないことである。

(2) ピリポの経歴

- ①アンデレやペテロと同じくベツサイダ出身(ガリラヤ湖の北東にある町)。
- ②この時、アンデレやペテロからイエスに関する情報を得たであろう。
- ③彼もまた、イエスをメシアと信じた。

2. 45~46節

Joh 1:45 ピリポはナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」

Joh 1:46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」ピリポは言った。「来て、見なさい。」

(1) ピリポは、ナタナエルを見つけた。

- ①改宗者は、情熱的な伝道者となる。
- ②「モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました」
 - *申 18:18 の預言
 - *預言者たちの預言
- ③「ナザレの人で、ヨセフの子イエスです」

(2) ナタナエルの応答

- ①「ナザレから何か良いものが出るだろうか」
- ②これは、当時のユダヤ人の普通の反応である。
 - *メシアは、エルサレムかヘブロンから出ると考えられていた。
- ③ガリラヤ地方は、ユダヤ(エルサレム)から見ると、格下である。
- ④そのガリラヤ地方の中でも、ナザレは特に軽蔑の対象であった。
- ⑤ピリポは、それ以上論じることはせず、「来て、見なさい」と言った。

3. 47~49節

Joh 1:47 イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた。「見なさい。まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。」

Joh 1:48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは答えられた。「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見ました。」

Joh 1:49 ナタナエルは答えた。「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」

(1) イエスのナタナエルに関する評価

- ①「まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません」

- ②ナタナエルは、イスラエルという名にふさわしい人物である。
- ③彼には、先祖ヤコブのような偽りが無い。

(2) ナタナエルの質問

- ①「どうして私をご存じなのですか」
- ②彼の疑問は、初対面の人が、どこからその情報を手に入れたのかということ。

(3) イエスの回答

- ①「いちじくの木の下にいるのを見ました」
 - *そこは、安全、休息、黙想の場を指す。
 - *1列4:25、ミカ4:4、ゼカ3:10
- ②これは、イエスの神性(全知全能)を啓示している。

(4) ナタナエルの告白

- ①「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」
 - *「ラビ」「神の子」「イスラエルの王」(2サム7:14、詩2:6~7)
- ②彼が、三位一体や受肉の真理を理解したということではない。

4. 50~51節

Joh 1:50 イエスは答えられた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったから信じるのですか。それよりも大きなことを、あなたは見るようになります。」

Joh 1:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るようになります。」

- (1) イエスがメシアであることを、より確実な証拠をもって信じるようになる。
 - ①「それよりもさらに大きなこと」とは、2~13章に出てくる奇跡である。
- (2) イエスは、ナタナエルが黙想していた個所まで言い当てている。
 - ①ベテルでヤコブが見た夢(創28:10~12)
 - *神の使いたちが、はしごを上り下りしている。
 - *1つのはしごが、天と地の間を結ぶ役割を果たしている。
 - *天使たちの上り下りは、天と地のコミュニケーションである。
 - *イエスは、天と地を結ぶ新しいコミュニケーションの方法である。
 - ③ヨハ1:18

Joh 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

結論

1. バプテスマのヨハネ

- (1) 自分は光ではなく、光について証しをする者である。
- (2) 自分は「ことば」ではなく、「ことば」について証しをする「声」である。
- (3) 弟子を失うことや、脇役になることを、いとわない。

2. アンデレ

- (1) 彼は、脇役である。
 - ①「シモン・ペテロの兄弟アンデレ」と呼ばれている。
- (2) 登場するときはいつも、人をイエスのもとに連れて来る。
 - ①1:42(ペテロ)、6:4~9(少年)、12:20~22(ギリシア人)

3. ペテロ

- (1) ペテロは、粗削りで、直情型の人間である。
- (2) イエスは彼に、ケファ(ペテロ)という新しい名を与えた。
 - ①イエスはペテロの可能性に目をとめた。
 - ②彼の信仰告白は、教会設立の土台となる。
 - ③教会誕生後、彼は岩のような役割を果たした。

4. ピリポは、ごく普通の人である。

- (1) ヨハネの福音書にしか情報はない。
 - ①登場する時は、アンデレとの関係で出て来る。
 - ②自分から積極的に求めるタイプではない。
 - ③イエスから彼を招かれた。
 - ④神の国の拡大のためには、ピリポタイプの人材も必要である。

5. ナタナエル

- (1) 見られているという意識の重要性
- (2) ナタナエルの信仰の土台は、ここにある。
- (3) カルト的リーダーシップの問題点は、不安感である。
- (4) 詩139篇

まとめ

- (1) 公生涯への序曲が始まった。
- (2) 異なった賜物を持った弟子たちが、それぞれの方法で証しをする。
- (3) 私たちの時代にも、神は大いなることをなさる。

ヨハネの福音書(3)
「カナの婚礼」—最初のしるし—
ヨハ2:1~12

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - * カナの婚礼(2:1~11)
 - * カペナウム滞在(2:12)

2. アウトライン

- (1) カナの婚礼(1~11節)
- (2) カペナウム滞在(12節)

3. 結論

- (1) 「時」ということばの重要性
- (2) 古いものから新しいもの

カナの婚礼について学ぶ。

I. カナの婚礼(1~11節)

1. 1節

Joh 2:1 **それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があり、そこにイエスの母がいた。**

- (1) 「それから三日目に」
 - ① ナタナエルがイエスに出会ってから3日目である。
 - ② 「その翌日」が3度出てきた(1:29、35、43)。
 - ③ 計算すると、バプテスマのヨハネの証言から7日目である。
 - ④ ヨハネが日数にこだわっている理由は、何か。
 - * 宇宙は7日間で創造された(創1章)。
 - * 公生涯の最初の7日間で、イエスが創造主であることが示された。
 - ⑤ カナの婚礼での奇跡によって、イエスの神性が証明された。
 - ⑥ イエスは、ナタナエルへの約束(1:51)を速やかに成就された。
 - * 「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るようになります」

- (2) 婚礼の場所は、ガリラヤのカナである。
 - ①現在、ナザレとカペナウムの間にはクファル・カナというアラブ人の村がある。
 - ②聖書時代のカナは、現在のカナよりも北にあったと思われる。
- (3) そこにイエスの母がいた。
 - ①ヨハネは、マリアという名を記さずに、「イエスの母」としている。
 - ②彼女は、単なる客ではなく、婚礼を開催する側の人間になっている。
 - ③恐らく、新郎新婦との親戚関係か、友人関係のゆえであろう。
 - ④花婿が花嫁を迎えに行き、自分の家に連れて来る。
 - ⑤それから、婚礼が始まる。通常1週間続いたが、それ以上の場合もあった。
 - ⑥小さな村では、村を挙げての祝いごとになる。

2. 2節

Joh 2:2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた。

- (1) この時点では、イエスの弟子は5人である。
 - ①12人が揃う前の出来事である。
- (2) イエスと弟子たちがなぜ招かれたのか。
 - ①イエスは、マリアの息子だから招かれた。
 - ②弟子たちは、ラビとタルミディム(弟子)の関係のゆえに、招かれた。
 - ③ナタナエルはカナ出身である(21:2)。
 - ④イエスの一行は、ナタナエルとの関係のゆえに招かれた可能性もある。
- (3) イエスは、普通のユダヤ人男性として、この社会的行事に参加している。
 - ①バプテスマのヨハネは、荒野で暮らしたが、イエスはそうではなかった。
 - ②喜びや悲しみを共有することと、霊性とは無関係である。

3. 3節

Joh 2:3 ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。

- (1) 「ぶどう酒がなくなると」
 - ①準備していた量のぶどう酒では、不足する場合がある。
 - ②その場合、花婿とその父は、大いに面目を失う。悪評は生涯続く。
 - ③招待客は、贈り物を持って来ている。
 - *花婿には、十分な食事を提供する法的義務がある。
 - ④途中で食事やぶどう酒がなくなった場合、訴訟沙汰になることもあった。

*その場合、招待客の贈り物の半分を弁済することになる。

(2) 母がイエスに深刻な状況を知らせた。

- ①夫が死んで以降は、息子に相談するのが習慣になっていたのであろう。
- ②イエスはまだ一度も、奇跡を行っていない。
- ③マリアは、イエスが奇跡を行うことを期待したわけではないだろう。

4. 4 節

Joh 2:4 **すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」**

(1) 「女の方」

- ①「婦人よ」(新共同訳、口語訳)
- ②ギリシア語で「グネイ」(グナイという呼びかけ)。
- ③決して見下した言い方ではない。
- ④ヨハ19:26

Joh 19:26 **イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。**

(2) 「あなたはわたしと何の関係がありますか」

- ①ヘブル的には、この表現には2つの使用方法がある。
 - *叱責する場合
 - *優しく拒否する場合(ラビが弟子に迎えることを断る場合)
- ②イエスは母に、公生涯が始まったことを教えようとしている。
 - *マリアは、家庭内におけるルール(親子関係)を持ち出している。
 - *イエスは、公生涯に入っている。
 - *イエスの関心事は、肉の母への忠誠ではなく、父なる神への忠誠である。

(3) 「わたしの時はまだ来ていません」

- ①「わたしの時」とは、十字架と復活の時である。
- ②イエスは、2つのことを告げている。
 - *自分が行動を起こす時は、まだ来ていない。
 - *自分は、父なる神の時と方法で奉仕をする。

5. 5 節

Joh 2:5 **母は給仕の者たちに言った。「あの方が言われることは、何でもしてください。」**

(1) 母の従順

- ①母は、イエスのことばをすべて理解したわけではない。
- ②しかし、イエスに従おうという姿勢を示した。
- ③母は、手伝いの人(ディアコノス)に指示を出した。
- ④「あの方が言われることは、何でもしてください」
*母は、イエスの力とあわれみに信頼を置いた。

(2) 私たちへの教訓

- ①母としてイエスに近づいたが、たしなめられた。
- ②信じる者としてイエスに委ねると、願いは聞かれた。

(3) この時点で、母の役割は終わった。

- ①イエスは、父なる神の御心に従って公生涯を歩み始める。

6. 6節

Joh 2:6 そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめが六つ置いてあった。それぞれ、二あるいは三メトレテス入りのものであった。

(1) 「ユダヤ人のきよめのしきたり」

- ①これは、モーセの律法の要求ではなく、ユダヤ教の口伝律法の要求である。
- ②宗教熱心なユダヤ人たちは、きよめのために食前と食後に手を洗った。

(2) 「石の水がめが六つ置いてあった」

- ①恐らく、家の外に置かれていたのであろう。
- ②婚礼の客のきよめのために、大量の水を必要とした。

*1メトレテスは、約40リットル。

*「二あるいは三メトレテス」は、80リットルから120リットル。

- ③石の水がめは永続的に使用できる。

*土器と違って、きよめることができる(レビ11:33)。

- ④この奇跡は、ユダヤ教の口伝律法が支配している状況下で行われた。

7. 7~8節

Joh 2:7 イエスは給仕の者たちに言われた。「水がめを水でいっぱいになさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。

Joh 2:8 イエスは彼らに言われた。「さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところを持って行きなさい。」彼らは持って行った。

- (1) 石の水がめの水を飲むのは、ユダヤ人にとっては、考えられないことである。

- ①しかし、母の指示を受けていた手伝いの者たちは、イエスに従った。

②「水がめを縁までいっぱいにした」

*ワインを追加したという疑惑をなくすため。

*全員が飲んでも不足しないように。

(2) 水を汲んで、料理長のところに運んだのは、給仕の者たちであった。

①イエスは、石の水がめに触れてもいない。

②イエスが願ったなら、水は瞬時にぶどう酒になった。

③いかなる疑惑の余地もない。

(3) この奇跡は、「時間の奇跡」である。

①イエスは、時間を短縮して水からぶどう酒を作った。

②作られたばかりのぶどう酒には、年数の経過が刻み込まれていた。

③宇宙の創造の場合も、同じである。

*アダムとエバは、大人の年齢に創造された。

④この奇跡は、イエスが創造主であることの証明である。

8. 9~10節

Joh 2:9 宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。それで、花婿を呼んで、

Joh 2:10 こう言った。「みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったところに悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました。」

(1) 宴会の世話役の驚き

①彼は、このぶどう酒は、花婿が用意したものと思った。

②このぶどう酒は、イエスから花婿への贈り物である。

③人生の各場面にイエスを招く人は、幸いである。

(2) 世話役は、花婿の人格をほめた。

①俗人のやり方とは、正反対である。

②奥ゆかしく、さりげない。

9. 11節

Joh 2:11 イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

(1) 「最初のしるし」

①「しるし」は、ギリシア語で「セイメイオン」である。

- ②イエスのメシア性を示す「しるし」である。
- ③公生涯の最初の7日間のクライマックスになる奇跡である。

(2) 「ご自分の栄光を現された」

- ①この奇跡は、イエスの神性を啓示するものである。

(3) 「それで、弟子たちはイエスを信じた」

- ①彼らが、イエスの死と復活まで理解したということではない。
- ②彼らの信仰は、漸進的啓示によって、試され、発展させられていく。

II. カペナウム滞在(12節)

1. 12節

Joh 2:12 その後イエスは、母と弟たち、そして弟子たちとともにカペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在された。

- (1) これは、エルサレム訪問の物語に移行するためのつなぎの聖句である。
 - ①イエスは、ガリラヤ湖畔の町カペナウムに下った。
 - *カペナウムがイエスの活動の本拠地になる予感がある。
 - ②短期間の滞在であった。
 - *イエスは、家族と別れて本格的な活動を開始する。

結論

1. 「時」ということばの重要性

(1) 2章4節

Joh 2:4 すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」

- (2) 「時」とは、十字架と復活の時である。
 - ①ヨハネの福音書での「時」は、父なる神の御心の時である。
 - ②また、父の栄光と子の栄光が現れる時である。
- (3) ギリシア語で「ホウラ」か「カイロス」である。
 - ①「時はまだきていない」 5箇所
 - *ヨハ2:4、7:6、8、30、8:20
 - ②「時がきた」 3箇所
 - *12:23、13:1、17:1
 - ③ヨハ13:1

Joh 13:1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。

(4) 母の要求と、イエスの行動原理の間に大きな隔りがある。

①ヨハネの福音書の学びは、「わたしの時」に向かって前進する作業である。

2. 古いものから新しいものへ

(1) 古い水が、新しいぶどう酒に置き換わった。

①最初の奇跡には、象徴的意味がある。

②婚宴と新しいぶどう酒は、メシア的王国の象徴である。

③また、救いの喜びの象徴である。

(2) 古い神殿が清められ、新しい神殿に置き換わった(宮きよめ)。

(3) 古い誕生が、新しい誕生に置き換わった(ニコデモとの対話)。

(4) 井戸の水が、生ける水に置き換わった(サマリアの女との対話)。

(5) 古い礼拝が、新しい礼拝に置き換わった(同上)。

(6) 2コリ5:17

2Co 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

①新生とは、新しいいのちの誕生である。

②聖化とは、そのいのちの成長である。

③栄化とは、そのいのちの完成である。

ヨハネの福音書(4)

最初の宮きよめ

ヨハ2:13~22

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - *最初の宮きよめ(2:13~22)
 - *人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)
 - *ニコデモに対する個人伝道(3:1~21)
 - *イエスをあがめるバプテスマのヨハネ(3:22~30)
 - *イエスの卓越性(3:31~36)

2. 前回の復習(最初のしるし)

- (1) イエスは、古いものを新しいものに置き換えた。
- (2) イエスとモーセの対比
 - ①モーセの最初の奇跡は、水を血に変えることであった(出7章)。
 - *「石の上に刻まれた文字による、死に仕える務め」(2コリ3:7)
 - ②イエスの最初の奇跡は、水をぶどう酒に変えることであった。
 - *「義とする務めは、なおいっそう栄光に満ちあふれ」(2コリ3:9)

3. この箇所注目点

- (1) 雰囲気が激変する。
 - ①カナからエルサレムへ
 - ②婚宴から礼拝へ
- (2) ヨハネだけが、最初のエルサレム訪問を記録している。
 - ①ヨハネは、エルサレムでイエスが行ったことに焦点を合わせている。
 - ②ヨハネは、イエスが神の子であることを示そうとしている。

4. アウトライン

- (1) イエスのメシア宣言(13~17節)
- (2) ユダヤ人たちの視点(18~20節)
- (3) 弟子たちの視点(21~22節)

5. 結論

- (1) イエスの愛の本質
- (2) 3日目の復活の意味

このメッセージは、最初の宮きよめについて学ぼうとするものである。

I. イエスのメシア宣言(13~17節)

1. 13~14節

Joh 2:13 さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。

Joh 2:14 そして、宮の中で、牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを見て、

(1) 「ユダヤ人の過越の祭り」

- ①過越の祭り、七週の祭り(ペンテコステ)、仮庵の祭りは、巡礼祭。
- ②ヨハネは、エルサレム崩壊後に、一般的な読者のために本書を書いた。
*教会は、過越の祭りを祝わなくなっていた。
- ③イエスは、律法に従って、巡礼祭を祝うためにエルサレムに上った。
*これは、公生涯に入ってから初めてのエルサレム訪問であった。
*地理的な意味でも、霊的な意味でも、「上り」に当たる。

(2) 「宮の中で」

- ①「宮」は、ギリシア語でヒエロン。
*「宮の中」とは、異邦人の庭のことである。
- ②「神殿」(19節)は、ギリシア語でナオス。
*聖所の建物ことである。

(3) 「牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たち」

- ①巡礼者の便宜を図るために、いけにえの動物が売られていた。
- ②両替人もいた。
*ローマのデナリ貨は、皇帝の像が彫られているので、使用不可。
*祭司たちは、ツロ貨しか受け取らなかった(銀の含有量が多い)。
*ツロ貨=4デナリ
*通常のシェケル貨=2デナリ
- ③ツロ貨の使用
*いけにえの購入のため
*神殿税を支払うため
- ④成人男子は、2分の1シェケル(1デナリ)を納める(出30:13)。

* ペテロが釣った魚の口からスタテル1枚が出て来た(マタ17:27)。

* ギリシア貨幣の1シェケル=2デナリ(2ドラクマ)

2. 15~16節

Joh 2:15 細縄でむちを作って、羊も牛もみな宮から追い出し、両替人の金を散らして、その台を倒し、

Joh 2:16 鳩を売っている者たちに言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」

(1) 宮とは、異邦人の庭である。

①改宗した異邦人は、ここまでしか入れない。

* エルサレムに上って来たギリシア人たち(ヨハ12:20)

* エチオピア人の宦官(使8:27)

②彼らは、静かに祈り礼拝を献げることができなかった。

③神の意図とは大いに異なる。

④イエスは、静かな礼拝が妨害されていることに怒りを覚えた。

(2) イエスは、いけにえの動物、商人、両替人を、宮から追い出した。

①マラ3:1~3には、神殿をきよめる方が突然来るという預言がある。

②この預言は、再臨の時に成就すると考えられる。

(3) 「わたしの父の家を商売の家にしてはならない」

①「わたしの父の家」

* ルカ2:49では、これはイエスの自己認識を示すことばであった。

* ここでは、イエスのメシア宣言となっている。

②「商売の家としてはならない」

* 商人や両替人たちに営業許可を与えていたのは、最高法院であった。

* サドカイ人やパリサイ人は、彼らから歩合を取っていた。

* 特に、大祭司の一家が大きな利益を得ていた。

* 大祭司カヤパは、神殿運営をファミリービジネスに変えていた。

3. 17節

Joh 2:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。

(1) これは、詩69:9の成就である。

①「あなたの家を思う熱心」とは、真の礼拝と神の栄光を慕う情熱である。

②真の礼拝を求めると、不信仰な者からの迫害がやってくる。

- ③ダビデは、そのことを経験した。
- ④ダビデの子であるイエスも、そのことを経験するようになる。
- ⑤イエスは、偽善的な指導者たちに宣戦布告をした。

(2) 公生涯における宮きよめ

- ①イエスは、公生涯の最初と最後に宮きよめを行った。
- ②これが、十字架に付けられる直接的原因となった。

II. ユダヤ人たちの視点 (18~20節)

1. 18節

Joh 2:18 **すると、ユダヤ人たちがイエスに対して言った。「こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか。」**

- (1) 「ユダヤ人たち」とは、神殿を管理している人たちであろう。
 - ①「このようなこと」とは、宮きよめ、つまり、メシアとして行動である。
 - ②「しるし」とは、メシアであることを証明する奇跡である。
 - ③1 コリ 1:22~24

1Co 1:22 **ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。**

1Co 1:23 **しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、**

1Co 1:24 **ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。**

- ④彼らは、宮きよめの正当性を問わずに、イエスの權威の証明を迫った。

(2) イエスの行為は、2種類の結果をもたらす。

- ①信じる者の信仰は、強められる。
- ②信じない者は、さらなるしるしを求める。

2. 19節

Joh 2:19 **イエスは彼らに答えられた。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」**

(1) イエスは、しるしを与えるが、彼らが要求したような形ではない。

- ①彼らが望むようなしるしを与えても、彼らは信じない。

(2) ここでのイエスの回答は、たとえ話と同じ性質を持っている。

- ①すぐには分からないので、聞き手は考えざるを得なくなる。
- ②真理を求める者には、やがて解き明かしが与えられる。

③信じない者には、いつまでも謎のままである。

(3) 「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる」

①常識的には、神殿(ナオス)の再建を指していると聞こえる。

②しかしイエスは、自分のからだの復活を預言している。

③復活は、不信者のためのヨナのしるしである(マタ12:38~40)。

3. 20節

Joh 2:20 そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。」

(1) ヘロデ大王による神殿拡張工事は未完であった。

①ヨセフスの記録によれば、ヘロデの第18年(前20~19年)に開始。

②それから46年後は、紀元27~28年。

③この工事は、紀元63年まで続く。

④そして、紀元70年に神殿は破壊される。

(2) 「あなたはそれを三日でよみがえらせるのか」

①「あなた」に強調点がある。

②ガリラヤの大工であるあなたごときに、できるはずはない。

(3) ユダヤ人たちはイエスのことばを誤解し、後にそれを悪用した。

①「この神殿を壊してみなさい」は、命令形(条件節)である。

②**マタ 26:60~61**

Mat 26:60 多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった。しかし、最後に二人の者が進み出て、

Mat 26:61 こう言った。「この人は、『わたしは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。」

③**使 6:13~14**

Act 6:13 そして偽りの証人たちを立てて言させた。「この人は、この聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめません。」

Act 6:14 『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」

III. 弟子たちの視点(21~22節)

1. 21~22節

Joh 2:21 しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。

Joh 2:22 それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。

- (1) 弟子たちもまた、イエスのことばの意味を理解できなかった。
 - ①メシアの死は、弟子たちの考えの中にはなかった。
 - ②復活を目撃して以降、神殿とはイエスの体であることを理解した。
 - ③今は分からなくても、やがて分かるようになる。

- (2) 弟子たちは、信仰の進展を経験した。
 - ①復活を目撃した。
 - ②イエスのことばを思い起こした。
 - ③聖書とイエスが言われたことばを信じた。

結論

1. イエスの愛の本質

- (1) 神の恵みと神の義は、表裏一体である。
 - ①恵みのない愛はなく、義のない愛もない。
- (2) 当時のユダヤ人たちは、出32章のイスラエルの民と同じ状態にあった。
 - ①2枚の石板の破壊(裁きの要素)
 - ②2枚の石板の再提供(恵みの要素)
- (3) イエスの怒りは、神の栄光が汚されていることへの怒りである。
 - ①汚れた礼拝が排除される。
 - ②清められた礼拝が始まる。

2. 3日目の復活の意味

- (1) イエスの預言には、死と3日目の復活ということ以上の意味がある。
- (2) 礼拝の改革
 - ①いけにえを中心とした神殿での礼拝は、終わろうとしている。
 - ②イエスは古いものを破壊し、新しいものを創造しようとしている。
 - ③エルサレムからの帰路、サマリアの女にこう語られた。

*ヨハ4:23~24

Joh 4:23 しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。

Joh 4:24 神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」

ヨハネの福音書(5)
ニコデモとの対話
—永遠のいのちを得る方法—
ヨハ2:23~3:21

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - *最初の宮きよめ(2:13~22)
 - *人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)
 - *ニコデモに対する個人伝道(3:1~21)
 - *イエスをあがめるバプテスマのヨハネ(3:22~30)
 - *イエスの卓越性(3:31~36)

2. この箇所の注目点

- (1) イエスに対する応答
 - ①指導者たちはイエスに敵対したが、民衆は好感を持った。
- (2) ヨハネは、7つの対話を記している。
 - ①その最初が、ニコデモとの対話である。
- (3) ニコデモは、紀元1世紀のユダヤ教の代表である。
 - ①ユダヤ教の代表である人物とイエスの対話が、かみ合わない。
 - ②紀元1世紀のユダヤ教が、いかに真理から逸脱していたかが分かる。
 - ③この対話は、ユダヤ的視点で読む必要がある。

3. アウトライン

- (1) 人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)
- (2) ニコデモとの対話(3:1~15)
- (3) ヨハネによる福音の要約(3:16~21)

4. 結論

- (1) 風と聖霊の対比
- (2) 青銅の蛇と人の子の対比

このメッセージは、イエスとニコデモの対話について学ぼうとするものである。

I. 人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)

1. 23節

Joh 2:23 過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。

- (1) イエスはしるしを行った(複数形)。
 - ①ヨハネは、しるしの内容を記していない。
 - ②癒しや悪霊の追い出しであろう。
 - ③宮清めの出来事はメシア宣言であり、しるしはメシア性の証明である。
- (2) 公生涯の初期に行われたしるしは、メシア性の証明である。
 - ①マタイ12章のベルゼブル論争を境に、しるしの目的が変化する。
 - ②しるしは、信仰があることを前提に、恵みのわざとして行われる。
- (3) 多くの人々が、その名を信じた。
 - ①「その名を信じた」とは、イエスを信じたということである。
 - ②癒し主として信じたが、罪からの救い主として信じたわけではない。

2. 24~25節

Joh 2:24 しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、

Joh 2:25 人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。

- (1) イエスは、彼らの「信仰」を信用しなかった。
 - ①その信仰は、しるしを見た結果、一時的な興奮状態に陥った信仰である。
 - ②イエスは、人の心の中を知っておられた。
 - *これはイエスの神性を示している。
 - *1サム16:7、使1:24~25
 - ③イエスが信用した人はいるのか。
 - *ニコデモ(2:25と3:1のつながりは、明白である)
 - *サマリアの女(不道徳であるが霊的事項に関心があった)

II. ニコデモとの対話(3:1~15)

1. 1節

Joh 3:1 さて、パリサイ人の一人で、ニコデモという名の人があった。ユダヤ人の議員であった。

(1) ニコデモは、「パリサイ人」である。

- ①パリサイ派は、死者の復活を信じていた(サドカイ派とは異なる)。
- ②ユダヤ人として生まれた者は、すべて神の国に入ると信じていた。
- ③バプテスマのヨハネは、これを否定していた(マタ3:9)。
- ④彼は、ラビであり、最高法院の議員である。

2. 2節

Joh 3:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられなければ、あなたがなさっているこのようなしるしは、だれも行うことができません。」

(1) 彼は、「夜」イエスのもとに来た。

- ①好意的に解釈すれば、ゆっくり話すために来たということかもしれない。
- ②ヨハネの福音書では、「夜」には深い意味がある(否定的な意味)。
- ③ニコデモは、人目を避けて来たのであろう。

(2) ニコデモのあいさつ

- ①イエスに「先生」と呼びかけた。原文では「ラビ」である。
 - *この呼びかけは、イエスに対して敬意を表したものである。
 - *ニコデモは、ラビ対ラビの対話を求めている。
- ②イエスが「神のもとから来られた」教師であることを認めた。
 - *原文では「神のもとから来られた」ということばに強調点がある。
- ③「私たち」とは、イエスを受け入れている他の議員たちであろう。
 - *アリマタヤのヨセフ、ラビ・ガマリエルなどがいた。
- ④イエスが行っているしるしは、神がともにおられることの証拠である。
 - *福音書では、イエスがしるしを行ったことを疑う人は出て来ない。

3. 3節

Joh 3:3 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

(1) イエスは、ただちに本論に入る。

- ①「まことに、まことに」は、強調のことばである。
- ②「新しく生まれなければ」は、新生の必要性を教えることばである。
 - *「アノウセン」は、「上から」とも訳せる。
 - *意識すると、「上から、新しく生まれなければ」となる。
- ③「神の国を見ることはできません」
 - *本書では、「神の国」という用語は2回しか出てこない(3、5節)。

- ・70年のエルサレム崩壊で、神の国の延期は明らかになった。
- *「神の国」とは、やがて地上に実現するメシア的王国であろう。
- *「神の国を見る」とは、永遠のいのちを得ることである。
- ④反抗者でない限り、神の国に入ることができるというのが当時の認識。
- ⑤イエスは、神の国での生活のためには、新しい性質が必要だと教えた。
 - *善良な指導者であるニコデモでさえも、そのままでは失格である。

4. 4節

Joh 3:4 ニコデモはイエスに言った。「人は、老いていながら、どうやって生まれることができますか。もう一度、母の胎に入って生まれることなどできるでしょうか。」

(1) ニコデモは、「新しく生まれる」ということばを知っていた。

- ①「新生」は、ラビ用語であった。
- ②旧約聖書(申30:6)は、新生を預言している。

Deu 30:6 あなたの神、【主】は、あなたの心と、あなたの子孫の心に割礼を施し、あなたが心を尽くし、いのちを尽くして、あなたの神、【主】を愛し、そうしてあなたが生きるようにされる。

③ラビ用語の「新生」の概念と申30:6の預言内容は、同じではない。

(2) ラビ用語の「新生」の意味(フルクテンバウム師の教え)

- ①異邦人がユダヤ教に改宗すること
- ②王になること
- ③パール・ミツバ(13歳)を迎えること
- ④結婚すること(既婚者であることは議員の資格である)
- ⑤30歳でラビになること
- ⑥イエシヴァ(神学校)の校長になること(通常は50歳)

*「イスラエルの教師」(10節)に定冠詞が付いている。

(3) 上記①と②はニコデモに該当せず、③から⑥はすべて終わっている。

①誕生から人生やり直すのは、不可能である。

5. 5~6節

Joh 3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。

Joh 3:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

(1) 「まことに、まことに」は、重要な教えであることを示している。

- ①「アーメン、アーメン」。

(2) 「水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません」

- ①「神の国に入る」＝「神の国を見る」
- ②イエスは、パリサイ派神学を否定した。
- ③「水によって生まれる」とは、赤子としての誕生のこと。
- ④「御霊によって生まれる」とは、聖霊による超自然的な誕生のこと。
- ⑤肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

6. 7～8節

Joh 3:7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っ
てはなりません。

Joh 3:8 風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行く
のか分かりません。御霊によって生まれた者もみな、それと同じです。」

(1) 「あなたがた」

- ①イエスは、ニコデモを筆頭とするラビ集団に語りかけている。

(2) ラビ的教授法が採用されている。

- ①知っていること（自然現象）から、知らないこと（超自然現象）へ。
- ②風の働きと聖霊の働きが、対比される。
 - *ともにヘブル語で「ルアハ」である。
 - *ギリシア語で「プニューマ」である。

7. 9～10節

Joh 3:9 ニコデモは答えた。「どうして、そのようなことがあり得るのでしょうか。」

Joh 3:10 イエスは答えられた。「あなたはイスラエルの教師なのに、そのことが分からない
のですか。」

(1) ニコデモの限界が露呈した。

- ①彼は、地上の領域でしかものごとを考えていない。

(2) イエスは驚かれた。

- ①神学校の校長でありながら、信仰の基本を理解していない。
- ②イザ 32:15、エレ 31:33、エゼ 36:25~27 など。

8. 11～13節

Joh 3:11 まことに、まことに、あなたに言います。わたしたちは知っていることを話し、
見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れません。

Joh 3:12 わたしはあなたがたに地上のことを話しましたが、あなたがたは信じません。それなら、天上のことを話して、どうして信じるでしょうか。

Joh 3:13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。

(1) 「わたしたち」

- ① イエス、および、新生体験をした信者たち
- ② 「わたしたち」は、知っていることを話し、見たことを証ししている。
- ③ 「あなたがた」は、わたしたちの証しを受け入れない。
- ④ ニコデモは、不信仰のイスラエルの象徴である。

(2) 「わたし」

- ① イエスのことばである。
- ② 「地上のこと」とは、神の国に入るために必要な新生のことである。
- ③ 「天上のこと」とは、死後の世界や新天新地のことである。
- ④ 天に上り、地上に戻ってきた者はいない。
- ⑤ イエスは天から下って来た者である。
- ⑥ イエスだけが、天上のことを話すことができる。

9. 14~15 節

Joh 3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。

Joh 3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

- (1) 青銅の蛇と人の子が対比される。

結論

1. 風と聖霊の対比

- (1) 人間には制御できない。
- (2) 目には見えないが、働きの結果は見える。
- (3) その働きは、神秘である。

2. 青銅の蛇と人の子の対比

- (1) 青銅の蛇が旗ざおの上に付けられた(民21:4~9)。
 - ① 青銅の蛇は、蛇に似ているが、毒はない。
 - ② 蛇にかまれた者は、それを仰ぎ見て生きた。
- (2) 人の子は、十字架に付けられる。
 - ① 人の子は、罪人に似ているが、罪はない。
 - ② 罪人は、人の子を仰ぎ見て生きる。

ヨハネの福音書(6)
福音の要約 一神の愛の啓示ー
ヨハ3:16~21

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - * 最初の宮きよめ(2:13~22)
 - * 人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)
 - * ニコデモとの対話(3:1~21)
 - * イエスをあがめるバプテスマのヨハネ(3:22~30)
 - * イエスの卓越性(3:31~36)

2. この箇所の注目点

- (1) 「ニコデモとの対話」が、前回途中で終わった。
- (2) 3:16~21は誰のことばか。
 - ① 使徒ヨハネのことばか、主イエスのことばか。
 - ② 使徒ヨハネのことばと理解して、話を進める。
 - ③ 3:16は、2~4章の中心聖句である。

3. アウトライン

- (1) 人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)
- (2) ニコデモとの対話(3:1~15)
- (3) ヨハネによる福音の要約(3:16~21)

4. 結論

- (1) 救いに至る信仰
- (2) ニコデモの救いは、ユダヤ人伝道のモデルである。

このメッセージは、永遠のいのちを得る方法について学ぼうとするものである。

I. 人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)

- (1) 多くの人たちが、イエスが行うしるしを見て、その名を信じた。
- (2) しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。

(3) 今もイエスは、私たちの心の中を見ておられる。

II. ニコデモとの対話(3:1~15)

- (1) イエスは、ニコデモが真理の探究者であることを知っておられた。
- (2) ニコデモは、紀元1世紀のユダヤ教の代表である。
- (3) イエスの福音とラビ的ユダヤ教がぶつかる。
- (4) ニコデモは、どちらを取るかの選択を迫られる。
- (5) 私たちも、福音を信じるか、日本教を信じるかの選択を迫られている。
- (6) 3:5

Joh 3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。

- ①水と御霊によって生まれる=新生体験
- ②神の国に入る=救われる=永遠のいのちを持つ。

III. ヨハネによる福音の要約(3:16~21)

1. 16節

Joh 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

- (1) イエスのことばであっても、ヨハネのことばであっても、結論は同じ。
 - ①この聖句は、福音の本質を簡潔に、的確に伝えている。
 - ②すべての単語が、重要な意味を持っている。

(2) 主語は「神」である。

- ①イエスの受肉は、神の愛から出たものである。

Joh 3:13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。

- ②イエスの十字架の死(14節)は、神の愛から出たものである。

Joh 3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。

- ③神は愛である。
- ④神の愛は、最善を与えるほどに深く、強く、真実なものである。
- ⑤「ひとり子」とは、比類なき子、置き換えがきかない子である。

(3) 神の愛の対象は「世」である。

- ①ユダヤ人たちは、神はイスラエルの子たちを愛していると信じていた。
- ②しかし神は、すべての人を愛しておられる。
- ③「世」とは、罪を宿した人間のことである。

(4) 神が犠牲を払う目的は「永遠のいのち」を与えるためである。

①神は、罪人が救われることを喜ばれる(エゼ18:23)。

Eze 18:23 わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——【神】である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。

②神は、罪人が滅びを免れるように、救いの道を用意された。

③イエス・キリストを信じるかどうかで、道が分かれる。

④神の愛を拒否する者は、滅びる。

*滅びとは、存在しなくなることではない。

*滅びとは、神との関係が断たれ、神の怒りがとどまる状態である。

⑤神の愛を受け入れる者は、永遠のいのちを受ける。

*神の愛を受け入れた者は、新生した人である(5節)。

Joh 3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。

*新生した人は、救いを失うことがない。

⑥永遠のいのちには、2つの側面がある。

*永遠に生きるという時間的側面

*神との平和を持つという質的側面

*ロマ5:1

Rom 5:1 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

*「平和を持っている」ということばに強調点がある。

2. 17節

Joh 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(1) 神は、御子を遣わすことなく、世をさばくこともできた。

①しかし、そうはしないで、御子を世に遣わされた。

(2) 神が御子を世に遣わされた目的

①世(罪人)を裁くためではない。

②御子によって世が救われるためである。

③御子は、究極的には世を裁かれるが、それは受肉の目的ではない。

(3) 9:39の内容と矛盾するか。

Joh 9:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

- ①この世はすでに滅びの途上にある。
- ②イエスは、その中から信じる者を救おうとされた。
- ③受肉の主目的は救いの提供であって、さばきは二次的なことである。
- ④光が輝けば、陰ができる。

3. 18~19節

Joh 3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者はすでにさばかれています。神のひとり子の名を信じなかったからである。

Joh 3:19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。

- (1) 御子を信じる者はさばかれぬ。

①5:24

Joh 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。

②ロマ8:1

Rom 8:1 こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

- (2) 信じない者はすでにさばかれています。

- ①ユダヤ人たちは、アブラハムの子孫はさばかれぬと信じていた。
- ②さばかれる理由は、御子を信じないことにある。
- ③荒野で青銅の蛇を見上げなかった者は、死を経験した(民21:4~9)。
- ④御子を信じない者は、霊的死の状態にある。

- (3) 光と闇の戦いというテーマが登場する。

- ①悪人が闇を好むのは、その行いが隠されるからである。
- ②真理を行う者が光を好むのは、その行いが光にさらされるためである。

4. 20節

Joh 3:20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。

- (1) 悪を行う者は、闇を愛するだけでなく、光を憎む。

①光を憎むとは、イエスを憎むことである。

- ②その理由は、光によってその行いが明るみに出されることを恐れるから。
- ③その恐れゆえに、イエスの方に来ない。
- ④彼らの不信仰の背後には、罪の問題がある。

(2) 人々は、福音を信じない理由を上げる。

- ①教会には偽善者がいる。
- ②イエスの奇跡や復活が信じられない。
- ③神がいるなら、この世になぜ苦しみがあるのか。
- ④これらの理由は、神への反抗を隠すための口実である。
- ⑤本当の理由は、「信じたくないから信じない」ということである。

Joh 3:21 しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。

(1) 真理を行う者は、光(イエス)の方に来る。

- ①彼らは、自分の罪を隠そうとしない。
- ②1 ヨハ1:8~9

1Jn 1:8 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。

1Jn 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

(2) 彼らは、神の子としての生活を始める。

- ①彼らは、自分たちの善行が神によるものであることを告白する。

結論

1. 救いに至る信仰

(1) 神の御業

- ①ひとり子を、私たちの罪を贖うために犠牲にされた。

(2) 私たちの責任

- ①それを神からの贈り物として受け取る(信じる)こと。
- ②多くの人たちが、自分は良くも悪くもないと考えている。
- ③それゆえ、イエスを信じない者が滅びるという教えに反発する。
- ④私たちは、中立ではなく、滅びるしかない罪人である。

2. ニコデモの救いは、ユダヤ人伝道のモデルである。

(1) ニコデモは、イエスのことばをすぐに理解したわけではない。

①次にくるのは、葛藤の段階である。

②現代のメシアニック・ジューも、同じところを通過する。

(2) ニコデモは、イエスの逮捕に際して、先ずイエスを尋問するように要求した。

①7:50~51

②この段階では、彼はまだ信者ではない。

(3) アリマタヤのヨセフとともに、イエスを埋葬した。

①19:39~40。

②この段階では、彼は信者になっている。

(4) ニクディモン・ベン・グリオンという名がタルムードに出て来る。

①エルサレム在住の、尊敬されていた裕福なユダヤ人。

②エルサレムの3人の義人のひとり。

③職業は井戸掘り。

④彼の娘は、物乞いをして回った(ラビ文書の記録)。

⑤ニコデモは、霊的には豊かになった。

ヨハネの福音書(7)
イエスとバプテスマのヨハネ
ー並行した奉仕ー
ヨハ3:22~36

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - *最初の宮きよめ(2:13~22)
 - *人の心の中を見抜くイエス(2:23~25)
 - *ニコデモとの対話(3:1~15)
 - *ヨハネによる福音の要約(3:16~21)
 - *イエスをあがめるバプテスマのヨハネ(3:22~30)
 - *イエスの卓越性(3:31~36)

2. この箇所の注目点

- (1) イエスの奉仕とバプテスマのヨハネの奉仕が、一時的に重なる。
- (2) バプテスマのヨハネは、イエスをあがめる。
- (3) 著者ヨハネは、イエスの卓越性を証明する。

3. アウトライン

- (1) イエスをあがめるバプテスマのヨハネ(3:22~30)
- (2) イエスの卓越性(3:31~36)

4. 結論

- (1) ユダヤ式結婚のたとえ
- (2) 私たちに与えられている奉仕

このメッセージは、イエスの卓越性について学ぼうとするものである。

I. イエスをあがめるバプテスマのヨハネ(3:22~30)

1. 22節

Joh 3:22 その後、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。

- (1) イエスはエルサレムを離れた。
 - ①ニコデモとの対話はエルサレムで起こったことである。
 - ②エルサレムもまた、ユダヤの地にある。
 - ③ここでの「ユダヤの地」とは、ユダヤ地方の田舎、荒野であろう。

- (2) イエスはそこで、バプテスマのヨハネと同じような働きを展開した。
 - ①バプテスマを授けていたのは、イエスの弟子たちであった(4:2)。
 - ②これは、悔い改めのバプテスマである。
 - ③イエスは、12使徒を任命する前から、弟子たちを訓練していた。

2. 23~24節

Joh 3:23 一方ヨハネも、サリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が豊かにあったからである。人々はやって来て、バプテスマを受けていた。

Joh 3:24 ヨハネは、まだ投獄されていなかった。

- (1) ヨハネの活動の場
 - ①「サリムに近いアイノン」がどこか、明確ではない。
 - ②ガリラヤ湖と死海の間はどこかである。
 - ③恐らく、シェケムの東5キロメートルの辺りであろう。
 - ④「そこには水が豊かにあったからである」
 - *乾季になると、ヨルダン川の水は南に行くほど少なくなった。
 - *それでヨハネは、北に移動して、そこで活動した。
 - *ユダヤ的文脈では、浸礼が重要であることが分かる。

- (2) 「人々はやって来て、バプテスマを受けていた」
 - ①短期間ではあるが、イエスの奉仕とヨハネの奉仕が重なった。
 - ②ユダヤからサマリアにかけて、大いに賑わったことであろう。
 - *ともに弟子たちがいた。
 - *ともに群衆が取り囲んだ。
 - *ともに洗礼を受けた(イエスの場合は、弟子たちが)
 - *ともに、悔い改めと、神の国の到来を説いた。

- (3) 「ヨハネは、まだ投獄されていなかった」
 - ①ヨハネの投獄と斬首は、イエスの公生涯の転機となる。
 - ②**ヨハネは、共観福音書の情報を前提に、この文章を書いている。**
 - ***マタ 14:1~12、マコ 6:14~29**
 - ③共観福音書は、ヨハネの投獄をイエスの公生涯の始まりと位置づける。

④ヨハネの福音書は、初期ガリラヤ伝道と初期ユダヤ伝道から始める。

3. 25節

Joh 3:25 ところで、ヨハネの弟子の何人かが、あるユダヤ人ときよめについて論争をした。

(1) 論争の当事者

- ①ヨハネの弟子の何人か
- ②あるユダヤ人

(2) 彼らは、「きよめについて論争をした」。

- ①具体的な内容は、分からない。
- ②エッセネ派の洗礼があった。
- ③パリサイ派の清めがあった(手足の清めから、器の清めまで)。
- ④この上、なぜヨハネやイエスの洗礼が必要かという議論があったのか。
- ⑤もし必要だとしたら、イエスの洗礼のほうが、価値があるのではないか。
- ⑥この論争は、次の26節の背景説明になっている。

4. 26節

Joh 3:26 彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証しされたあの方が、なんと、バプテスマを授けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています。」

(1) 弟子たちは、ヨハネのために、嫉妬を感じた。

- ①「あの方」と言い、イエスという名を意図的に避けている。
- ②ヨハネがイエスを認定したことを、柔らかく責めている。
- ③「あの方」のほうが、人気が出ている。
- ④「皆」というのは、誇張法である。
- ⑤共同訳では、弟子たちは「あの人」、ヨハネは「あの方」と言っている。

(2) ヨハネの弟子たちは、ヨハネの奉仕の目的を忘れていた。

- ①彼らは、ヨハネの影響力が縮小していくことに耐えられなかった。

5. 27~28節

Joh 3:27 ヨハネは答えた。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。」

Joh 3:28 『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。

- (1) ヨハネは、弟子たちが忘れてしまった真理を思い出させている。
 - ①各人の奉仕の範囲は、神が決めておられる。
 - ②イエスの奉仕が拡大しているのは、神がそれを許しておられるから。
- (2) ヨハネは、自分がキリストだと言ったことはない。
 - ①ヨハネの奉仕は、メシアの先駆者としてのそれである。
 - ②ヨハネの弟子たちは、その証しを何度も聞いてきた。

6. 29節

Joh 3:29 花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。

- (1) ヨハネは、ユダヤ的たとえを語る。
 - ①自分は、花婿の友人である。
 - ②花婿が主役であり、自分は脇役である。
 - ③自分は花婿の援助役に召されている。
 - ④花婿の喜びは、自分の喜びである。

7. 30節

Joh 3:30 あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」

- (1) これは究極的な謙遜のことばである。
 - ①これは、神から与えられた役割を理解した人のことばである。
 - ②彼には、自分はメシアの先駆者であるという認識があった。
- (2) このことばは、すべての奉仕者への教訓である。
 - ①弟子のゴールは、偉大な奉仕を誇ることではない。
 - ②神への従順と、イエスをあがめることが、弟子の喜びとなるべきである。
- (3) いつまでもバプテスマのヨハネに固執した弟子たちがいた。
 - ①使 18:24~26
 - *アポロは、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。
 - ②使 19:1~7
 - *エペソには12人のバプテスマのヨハネの弟子たちがいた。

II. イエスの卓越性(3:31~36)

- (1) バプテスマのヨハネのことばでなく、福音記者ヨハネのことばである。
 - ①後に明らかになるキリスト論が展開されている。

- ②ここにあるのは、十字架と復活後に与えられる視点である。
- ③私たちが信じたキリストというお方の卓越性を確認しよう。

1. 31~33節

Joh 3:31 上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。

Joh 3:32 この方は見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。

Joh 3:33 その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである。

(1) 「上から来られる方」と「地から出る者」の対比

- ①キリストの起源は、天にある。
- ②それゆえ、キリストは地上の誰よりも偉大である。
- ③キリストは、天において見たこと、聞いたことを証しされる。
- ④人間は、地に属し、地上のことしか理解できない。
- ⑤それゆえ、だれもその証しを受け入れない。

(2) 2種類の人間

- ①メシアのことばを信じない人
 - * 「だれも」とあるのは、誇張法である。
- ②メシアのことばを信じる人
 - * 「神は真実であるということに確認の印を押した」
 - * イエスを信じる者は、神を信じるのである。
 - * イエスを信じない者は、神を信じないのである。

(例話) 決心したときの心の動き

(3) 1ヨハ5:10

1Jn 5:10 神の御子を信じる者は、その証しを自分のうちに持っています。神を信じない者は、神を偽り者としています。神が御子について証しされた証言を信じていないからです。

2. 34節

Joh 3:34 神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。

- (1) イエスは神から遣わされた方である。
 - ①ヨハネの福音書では、これが39回も出て来る。

(2) イエスは神のことばを話される。

①旧約聖書の預言者たちは、限定された範囲で聖霊を与えられた。

②神はイエスに聖霊を無限に与えたので、イエスは神のことばを語られる。

(例話) 説教者のために、この聖句を用いて祈ることの誤り。

3. 35~36節

Joh 3:35 父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった。

Joh 3:36 御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

(1) 父と子は、愛と信頼の関係で結ばれている。

①父と子はひとつである。

②万物は、父から御子の手に渡されている。

(2) 御子に対する態度は、そのまま父に対する態度となる。

①御子を信じる者は、永遠のいのちを持つ。

②御子を信じない者は、神の怒りの中にある。

* 神の怒りとは、罪や不義に対する怒りである。

* 現代人は、神の怒りを軽く考えている。

結論

1. ユダヤ式結婚のたとえ

Joh 3:29 花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。

(1) 花婿はキリストである。

(2) 花嫁は、教会である。

①2 コリ 11:2

②エペ 5:32

③黙 19:6~8

(3) バプテスマのヨハネは、花婿の友人である。

①花婿は、1名か2名の友人を任命する。今日のベストマンと同じである。

②友人の役割は、花婿と花嫁を結びつけることである。

③友人は、宴会の準備をする。

④初夜においては、部屋の外か天幕の外に立ち、花婿の声を待つ。

* 花婿から、結婚が完成したとの声がかかる。

* 時には、血のついた白い布が友人に渡されることもある。

* その知らせを宴会場に持っていくと、宴会がさらに盛り上がる。

- ⑤バプテスマのヨハネは、新約時代の教会の一員ではない。
- ⑥教会は、使2章で誕生した。

2. 私たちに与えられている奉仕

(1) ヨハ3:27

Joh 3:27 ヨハネは答えた。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。

(2) ヨハ3:34

Joh 3:34 神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。

(3) イエスの奉仕は無限であるが、私たちの奉仕には制限が設けられている。

- ①イエスに御霊が無限に与えられているのは、イザ11:1~2の成就。
- ②私たち人間は、神の許しの範囲内でしか、活動することができない。
- ③旧約時代の預言者たちは、その時だけ、聖霊の影響を受けた。
- ④新約時代の信者には、それぞれに、異なった賜物が与えられている。

*1 コリ12:7~11 参照

(4) 私たちの奉仕のゴール

- ①キリストがあがめられること
- ②自分に委ねられた範囲内で全力を尽くすこと
- ③競争ではなく、補完し合うこと

ヨハネの福音書(8)
サマリアの女との対話
ヨハ4:1~26

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - * サマリアの女との対話(4:1~26)
 - * 弟子訓練(4:27~38)
 - * サマリア人の回心(4:39~42)

2. アウトライン

- はじめに: 対話の背景(1~4節)
- (1) 生ける水の提示(5~14節)
- (2) 罪の指摘(15~19節)
- (3) 真の礼拝の啓示(20~24節)
- (4) メシア宣言(25~26節)

3. 結論

- (1) ニコデモとサマリアの女の対比
- (2) 真の礼拝

サマリアの女に啓示された真理について学ぶ。

はじめに: 対話の背景(1~4節)

1. 1~3節

Joh 4:1 パリサイ人たちは、イエスがヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けている、と伝え聞いた。それを知るとイエスは、

Joh 4:2 —バプテスマを授けていたのはイエスご自身ではなく、弟子たちであったのだが—

Joh 4:3 ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた。

- (1) パリサイ人との論争は、奉仕の妨げとなる。

- ① 本書では、パリサイ人が不信仰なイスラエルの代表となっている。

2. 4節

Joh 4:4 しかし、サマリアを通過して行かなければならなかった。

(2) サマリアを通るのが近道であるが、ここでは、靈的必然性が強調されている。

①イエスは、父の計画通りに行動された。

I. 生ける水の提示(5~14節)

1. 5~6節

Joh 4:5 それでイエスは、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近い、スカルというサマリアの町に来られた。

Joh 4:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた。時はおよそ第六の時であった。

(1) ユダヤからガリラヤに向かう途中、スカルというサマリアの町に来られた。

①スカルは、シェケム(現代のナブルス)の東にある。

②ここは、ヨセフ族の所有地となった(ヨシ24:32)。

③伝承では、ヤコブがこの井戸を掘ったとされている。

④今も、この井戸は存在している。深さは30mほど。

(2) 「イエスは旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた」

①人間イエスの姿がここにある(旅人が経験する渇きと疲労)。

(ILL) 初めての聖地訪問での体験

②しかし、イエスは常に働いておられた(ヨハ5:17)。

③受肉の神秘がここにある。

(3) 「時はおよそ第六の時であった」

①ユダヤ式なら、正午頃(午前6時から数え始める)。

②ローマ式なら、午後6時頃(午前0時から午後0時から数え始める)。

2. 7~8節

Joh 4:7 一人のサマリアの女が、水を汲みに来た。イエスは彼女に、「わたしに水を飲ませてください」と言われた。

Joh 4:8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。

(1) この時間に一人で水を汲みに来るのは、人目を避けているからである。

①公の場で、男性が女性に語りかけることはなかった。

②特に、ユダヤ人の男性がサマリア人の女性に語りかけることはなかった。

③イエスは、人種的、宗教的、社会的壁を乗り越えて、この女に語りかけた。

④弟子たちは、食物を買いに、町に出かけていた。

*パリサイ人は、サマリア人から買い物をしなかった。

⑤イエスは、水を求めることによって、自らを負債者の立場に置いた。

3. 9節

Joh 4:9 そのサマリアの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。

(1) この女のことばには、皮肉が混じっている。

①ユダヤは普段はサマリア人を見下している。

②助けが必要になると、私たちを利用しようとする。

「まあ、あなたはユダヤ人ではありませんか。サマリア人の私に、どうして水をくれなどと頼むのですか」(リビングバイブル)

(2) ユダヤ人とサマリア人の間には、長い人種対立の歴史があった。

①「ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである」

*「スンクロマイ」は、同じものを共有しないという意味である。

4. 10節

Joh 4:10 イエスは答えられた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、水を飲ませてくださいとあなたに言っているのがだれなのかを知っていたら、あなたのほうからその人に求めていたでしょう。そして、その人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

(1) 生ける水(マイム・ハイム)は、ユダヤ的文脈では、動いている水である。

①これは、聖霊を指す比喩のことばである。

②彼女が興味を持っている地上的話題(水)から始め、霊的真理に導いて行く。

(2) 女は、2つのことに興味を示した。

①神の賜物(生ける水)とは何か。

②その賜物を無代価で与えるというこのユダヤ人は誰か。

5. 11~12節

Joh 4:11 その女は言った。「主よ。あなたは汲む物を持っておられませんし、この井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れられるのでしょうか。」

Joh 4:12 あなたは、私たちの父ヤコブより偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を下さって、彼自身も、その子たちも家畜も、この井戸から飲みました。」

(1) 「主よ」は、キュリオス(キュリエ)という呼びかけである。

- ①これは、英語の「Sir」である。
- ②井戸は深い、水を汲む道具がない。
- ③先祖のヤコブよりも偉いのか(否定形の答えを想定した疑問文)。
- ④サマリア人が、「私たちの父ヤコブ」と言っているのは、興味深い。
*彼らは、ユダヤ人もサマリア人も、ヤコブの子孫だと信じていた。
- ⑤ヤコブ以下の人に、どうしてより優れた水が提供できるのか。

6. 13~14節

Joh 4:13 イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渴きます。」

Joh 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」

(1) 井戸の水と生ける水の対比

- ①この水を飲んでも、また渴く。
- ②イエスが与える水を飲むなら、渴くことがない。
*その水は、心の中で泉となり、永遠のいのちの実質を体験させる。

II. 罪の指摘(15~19節)

1. 15節

Joh 4:15 彼女はイエスに言った。「主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

(1) イエスが提供する水を手に入れたら、水汲みの仕事から解放される。

- ①彼女は、「永遠のいのちへの水」ということばを聞き逃している。

2. 16~18節

Joh 4:16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」

Joh 4:17 彼女は答えた。「私には夫がいません。」イエスは言われた。「自分には夫がない、と言ったのは、そのとおりです。」

Joh 4:18 あなたには夫が五人いましたが、今一緒にいるのは夫ではないのですから。あなたは本当のことを言いました。」

(1) イエスは、彼女の罪を指摘する。

- ①彼女には、5人の夫がいたが、今は夫でない男と住んでいる。
- ②イエスは、人の心のうちにあるものを知っておられた(ヨハ2:24~25)。
- ③人は、自分の罪を指摘されると、神学的議論を展開し始める。

3. 19節

Joh 4:19 彼女は言った。「主よ。あなたは預言者だとお見受けします。」

(1) 「主よ」から「預言者」への変更がある。

- ①サマリア人の神学では、モーセの次に登場する預言者は、メシアである。
- ②彼女は、イエスがメシアだと思い始めている。
- ③対話の最後には、イエスがメシアであることを信じるようになる。

III. 真の礼拝の啓示(20~24節)

1. 20節

Joh 4:20 私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

(1) 彼女は、ユダヤ人とサマリア人の対立の中心点について質問した。

- ①サマリア人は、礼拝の場所はゲリジム山だと言う(モーセの五書だけ)。
- ②ユダヤ人は、エルサレムだと言う(ダビデの時代の歴史を知っている)。

2. 21~22節

Joh 4:21 イエスは彼女に言われた。「女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます。」

Joh 4:22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。」

(1) 新しい時代の到来

- ①礼拝の場所が問題ではなくなる時がくる。
- ②それよりも重要なのは、いかに神を礼拝するかである。

(2) サマリア人は、自分たちが礼拝している神を知らない。

- ①彼らは、モーセの五書以外の旧約聖書を否定していた。
- ②彼らは、異教の習慣を混入させていた。

(3) 「救いはユダヤ人から出る」

- ①ユダヤ人は、旧約聖書全体を受け入れていた。
- ②旧約聖書はユダヤ人の作品であり、その中心テーマは「救い」である。
- ③それゆえ、「救いはユダヤ人から出る」と言える。

3. 23~24節

Joh 4:23 しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。」

Joh 4:24 神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」

- (1) 父は真の礼拝者たちを求めておられる。
 - ①真の礼拝者とは、御霊と真理によって礼拝する者である。

- (2) イエスは、父なる神を解説された。
 - ①神は霊である。
 - ②神の本質を3文字で啓示した。
 - *ニューマ・ホ・セオス (God is spirit.)
 - ③神に物理的実体はない。
 - *神は光である。
 - *神は愛である。

IV. メシア宣言 (25~26 節)

1. 25 節

Joh 4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。」

- (1) サマリア人もまた、ユダヤ人同様に、メシア信仰を持っていた。
 - ①彼らのメシア像は、教師としてのメシアである。
 - ②それゆえ、メシアが到来したなら、すべての宗教的混乱は収まるはずである。

2. 26 節

Joh 4:26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

- (1) イエスは、ユダヤ人に対しては、裁判の時までメシア宣言はしなかった。
 - ①ユダヤ人のメシア観は、政治的解放者である。
 - ②イエスのメシア宣言がローマに対する反乱につながる可能性があった。

- (2) イエスは、メシア宣言によって、サマリアの女を信仰へと招かれた。
 - ①通常は、「I am ○○.」であるが、ここでは、絶対的な「I am.」である。
 - ②「あなたと話しているこのわたしである」と訳すべきだろう。
 - ③出3:14

Exo 3:14 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」

- ④【主】(ヤハウエ)(わたしは「わたしはある」という者)が語っている。

結論

1. ニコデモとサマリアの女の対比

- (1) 著名なユダヤ人の教師 vs. 名もなきサマリア人の罪人
- (2) 夜の訪問 vs. 昼間の出会い
- (3) ユダヤ人の代表 vs. 非ユダヤ人の代表

2. 真の礼拝 (4:23)

Joh 4:23 しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。

- (1) ヨハネの福音書では、「時」(ホーラ)は重要な神学用語である。
 - ① イエスの十字架と復活の先にある「時」である。
 - ② と同時に、「今がその時です」とも言える。
 - ③ 将来成就する新しい礼拝が、今すでに現実のものとなっている。
- (2) ここでの「時」は、新約時代のことである。
 - ① 今私たちは、その時代に生かされている。
 - ② 建物は必要であるが、建物志向のキリスト教には危険性がある。
 - ③ ユダヤ人であるか、非ユダヤ人であるかは、問題ではない。
- (3) 真の礼拝者とは、御霊の助けによって真実に神を礼拝する人たちである。
 - ① 儀式だけで心がこもっていない礼拝は、神に喜ばれない。
 - ② 偽善的な礼拝は、神に喜ばれない。
- (4) 真の礼拝は、24時間、どこにいても可能である。
 - ① 終末論的には、エルサレムは再び重要性を持つようになる。

ヨハネの福音書(9)
弟子訓練とサマリア人の回心
ヨハ4:27~42

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - *サマリアの女との対話(4:1~26)
 - *弟子訓練(4:27~38)
 - *サマリア人の回心(4:39~42)

2. 注目すべき点

- (1) 弟子訓練における強調点
 - ①伝道した者への報酬
 - ②伝道の緊急性
 - ③伝道における協力関係
- (2) ユダヤ人の応答 vs. サマリア人の応答
 - ①ユダヤ人よりもサマリア人(異邦人)のほうが積極的に応答する。
 - ②福音書でも使徒の働きでも、同じ傾向が見られる。

3. アウトライン

- (1) 弟子訓練(27~38節)
- (2) サマリア人の回心(39~42節)

3. 結論

- (1) イエスの動きと教会の宣教の広がりとの対比
- (2) 第2の糧の原則
- (3) 伝道の原則

弟子訓練とサマリア人の回心

I. 弟子訓練(27~38節)

1. 27節

Joh 4:27 そのとき、弟子たちが戻って来て、イエスが女の人と話しておられるのを見て驚いた。だが、「何をお求めですか」「なぜ彼女と話しておられるのですか」と言う人はだれもいなかった。

- (1) 弟子たちは、町へ買い物に出かけていた。
 - ①生卵、果物、野菜などのコシエルの食物を探す。
 - ②代金を払って食物を買う。
 - ③それを持って、イエスのもとに帰って来た。

- (2) 彼らは、あり得ない光景を見て驚いた。
 - ①ユダヤ教のラビたちは、婦人との会話を控えるように教えた。
 - ②彼らは、公の場での妻との対話さえ疑問視した。
 - * 誘惑に陥らないために
 - * 他者から批判されないために
 - ③イエスの弟子たちは、3重の意味で驚いた。
 - * イエスが、公の場で婦人と話している。
 - * しかも、この婦人はサマリア人である。
 - * さらに、道徳的に問題のありそうな婦人である。

- (3) 弟子たちは、イエスを信頼していた。
 - ①彼らは、イエスに状況説明を求めなかった。
 - ②理解できなくても、師であるイエスに信頼した。

2. 28節

Joh 4:28 彼女は、自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った。

- (1) 彼女がその場を離れた理由
 - ①イエスに自分の過去を言い当てられたため、大いに驚いた。
 - ②弟子たちが帰って来たので、2人だけの対話が難しくなった。

- (2) 彼女は、自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った。
 - ①ここには、目撃者情報の雰囲気がある。
 - ②水がめを置いて帰ったのは、最初の目的を忘れたということである。
 - ③このエピソードは、彼女の驚きの大きさを示している。
 - ④ユダヤ人の間では、婦人の証言(特に罪の女の証言)は重視されなかった。
 - ⑤サマリア人の間でも、同じであろう。
 - ⑥しかし彼女は、自分が出会ったメシアを町の人たちに紹介しようとした。
 - ⑦ヨハ1:46

Joh 1:46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」ピリポは言った。「来て、見なさい。」

3. 29 節

Joh 4:29 「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がキリストなのではないでしょうか。」

(1) 彼女の伝道法には知恵がある。

①彼女は、キリストに出会ったとは断言していない。

* 断定的に伝えたとしても、拒否されたであろう。

②「もしかすると、この方がキリストなのではないでしょうか」と疑問文を使っている。

* 町の人たちに、自分で確かめるように提案している。

(2) 彼女は、イエスをキリストだと考える理由を述べた。

①イエスの行為

* イエスは、彼女の人生における主要な出来事を言い当てた(行為)。

* 「私がしたことを、すべて私に話した人がいます」は、誇張法である。

②イエスのことば

* 「あなたと話しているこのわたしがそれです」(26節)と言った。

4. 30 節

Joh 4:30 そこで、人々は町を出て、イエスのもとにやって来た。

(1) 人々は、町を出て、イエスのもとにやって来た。

①自分の目と耳で、イエスは誰かを判断するためである。

②彼らは、仕事を中断して、井戸のそばまで来た。

③中には、彼女との関係がばれることを恐れた男たちがいたかもしれない。

5. 31~32 節

Joh 4:31 その間、弟子たちはイエスに「先生、食事をしてください」と勧めていた。

Joh 4:32 ところが、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたが知らない食べ物があります。」

(1) 弟子たちはイエスに食事を勧めた。

①イエスは、疲れ切っていた。

②空腹と渇きで苦しんでいた。

(2) しかしイエスは、この機会を弟子訓練のために用いた。

①「わたしには、あなたがたが知らない食べ物があります」

- ②ここでは、「食物」ということばが比喩として用いられている。
- ③旧約聖書では、この比喩は「召命」と関連して用いられることがある。
- ④エレ15:16

Jer 15:16 私はあなたのみことばが見つかったとき、／それを食べました。／そうして、あなたのみことばは、私にとって／楽しみとなり、心の喜びとなりました。／万軍の神、【主】よ、／私はあなたの名で呼ばれているからです。

- ⑤弟子たちは、肉体の糧しか考えていないが、第2の糧というものがある。
- ⑥イエスにとっては、肉体の糧よりも、父の御心を行うことのほうが重要。
- ⑦今まさに、サマリアの町に靈的覚醒が起ころうとしていた。

6. 33~34節

Joh 4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれかが食べる物を持って来たのだろうか。」

Joh 4:34 イエスは彼らに言われた。「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。」

- (1) 弟子たちは、第1の糧（肉体の糧）について論じた。
 - ①苦勞して食物を買って来た。
 - ②持って来るのが遅すぎたので、誰か別の人が食物を持って来たのだろうか。
 - (2) イエスは、第2の糧（比喩的意味での糧）について解説した。
 - ①イエスの使命は、自分を派遣された父なる神の御心を実行することである。
 - *これは、ヨハネの福音書の最初からのテーマである。
 - ②父なる神の御心を実行することは、靈的力となり喜びとなる。
 - *サマリアの女に伝道したことは、イエスにとっては喜びであった。
 - *永遠のいのちを届けることは、靈的力となり喜びとなる。
- (ILL) アンケートのコメント：疲れていたが、礼拝に出て、元気になった。

7. 35節

Joh 4:35 あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れだ』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。

- (1) 収穫時期に関する格言
 - ①麦の種を蒔いて発芽してから、収穫までに4か月ある。
 - ②これは、自然界の収穫のことである。
 - ③イエスは、知っていることから知らないことへと導く（靈的収穫のこと）。
- (2) 「目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています」

- ①霊的世界の収穫は、別の原理で動いている。
- ②「色づいて」(新改訳2017)(共同訳)(口語訳)
- ③「黄ばみて」(文語訳)
- ④ギリシア語は「リュウコス」(白)である。
- ⑤緑色が、薄い白や黄色に変わると、収穫の時となる。
- ⑥イエスは、白い衣を着たサマリア人が大勢やって来るのを見たのであろう。

8. 36~38節

Joh 4:36 すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに至る実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。

Joh 4:37 ですから、『一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる』ということばはまことです。

Joh 4:38 わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです。」

(1) 蒔く者と刈る者に関する格言

- ①イエスが登場して以降、常に収穫の時である。
- ②刈る者と蒔く者が、ともに喜ぶ。
- ③この文脈では、蒔く者とはイエスとサマリアの女である。
- ④刈る者とは、サマリア人の救いを目撃する弟子たちである。。

(2) 「わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました」

- ①イエスは、預言的に語っている。
- ②イエスは、十字架と復活後の視点を持っていた。

II. サマリア人の回心(39~42節)

1. 39節

Joh 4:39 さて、その町の多くのサマリア人が、「あの方は、私がしたことをすべて私に話した」と証言した女のことばによって、イエスを信じた。

(1) 多くのサマリア人が、この女の証言によってイエスを信じた。

- ①サマリア人は、メシアを待ち望む信仰を持っていた。
- ②ユダヤ人よりもサマリア人のほうが、積極的に応答した。
- ③彼らは、イエスに出会ったのである。
- ④サマリアの女の証言は、私たちにとって励ましとなる。

2. 40節

Joh 4:40 それで、サマリア人たちはイエスのところに来て、自分たちのところに滞在してほしいと願った。そこでイエスは、二日間そこに滞在された。

(1) サマリア人たちは、イエスに、自分たちの村に滞在してほしいと願った。

①サマリア人がユダヤ人のラビを招くためには、謙遜が必要である。

(2) イエスは、サマリア人の要請に応じて、そこに2日間滞在した。

①「メノウ」(とどまる)という動詞が、2回使用されている。

②ヨハ1:39では、弟子たちはイエスのもとにとどまった。

③ここでは、イエスはサマリア人の町にとどまった。

④このときイエスは、サマリア人の食事を食べ、サマリア人の家で寝た。

⑤イエスは、ユダヤ教の「清め・汚れ」の教えを完全に無視された。

3. 41~42節

Joh 4:41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。

Joh 4:42 彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているわけではありません。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主だと分かったのです。」

(1) ここでは、宣教の拡大が見られる。

①井戸に来なかった人たちの多くが、イエスのことばによって信じた。

(2) さらに、信仰の深まりが見られる。

①最初は、サマリアの女の証言によって信じた。

②次は、イエスのことば(ロゴス、単数形)によって信じた。

③2重の証言には力がある。

*信者の証言とみことばの証言

(3) 「この方が本当に世の救い主だと分かったのです」

①「世の救い主」という表現は、福音書の中ではここだけに登場する。

②イスラエルは、メシアを拒否する方向に進む(1:11)。

③サマリア人は、信仰に導かれる。

*彼らは、軽蔑された民、二級市民ではなくなった。

*彼らは、救われる非ユダヤ人の初穂である。

結論

1. イエスの動きと教会の宣教の広がりとの対比

(1) ヨハネの福音書でのイエスの動き

①エルサレム→ユダヤ→サマリア→ガリラヤ(遠隔地)

②イエスは弟子たちに、福音の普遍性について教えようとされた。

③礼拝の改革の予感はずでにあった。

* 宮清めと3日目の復活

* 礼拝する場所は、問題ではなくなる。

(2) 使徒の働きでの宣教の広がり

①使1:8

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

2. 第2の糧の原則

(1) 現代人の特徴

①物の世界だけが現実であるという認識

②目に見えない世界(霊的世界)の軽視

(2) 第2の糧の特徴

①第1の糧を否定したり軽視したりすべきではない。

②第2の糧は、第1の糧よりも優先されるべきものである。

* ここにあるのは、一時的なものと、永続性のあるものの対比である。

3. 伝道の原則

(1) ヨハ4:37~38

Joh 4:37 ですから、『一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる』ということばはまことです。

Joh 4:38 わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです。」

(2) 蒔く者

①旧約聖書の預言者たち

②特に、バプテスマのヨハネ

(3) 刈る者

①イエスの弟子たち

②バプテスマのヨハネは、ペンテコステの祝福の前に死んだ。

(4) 蒔く者も、刈る者も、ともに喜ぶ。

①ともに報酬に与る。

②この報酬は、今の世で与えられ、永遠に続くものでもある。

(5) 福音宣教の普遍性に注目する必要がある。

①クリスチャンは、互いに宣教のパートナーである。

②蒔く者は、刈る者に対して妬みを覚えてはならない。

③刈る者は、蒔く者に対して優越感を覚えてはならない。

ヨハネの福音書(10)

第2のしるし

ヨハ4:43~54

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - *ガリラヤへの帰還(4:43~45)
 - *第2のしるし(4:46~54)

2. 注目すべき点

- (1) 第1のしるしは、カナで行われた(2:1~11)。
- (2) 第2のしるしも、カナで行われる(4:46~54)。
- (3) 2つのしるしに挟まれている部分は、「inclusio」(囲み部分)である。
- (4) これでイエスの移動が完結する。
ガリラヤ(カペナウム)→エルサレム→サマリア→ガリラヤ(カペナウム)

3. アウトライン:ガリラヤ伝道の再開

- (1) ガリラヤへの帰還(43~45節)
- (2) 第2のしるし(46~54節)

4. 結論:この「inclusio」が伝えるイエス像

ガリラヤ伝道の再開について学ぶ。

I. ガリラヤへの帰還(43~45節)

1. 43節

Joh 4:43 さて、二日後に、イエスはそこを去ってガリラヤに行かれた。

- (1) イエスはサマリアの町に2日間滞在した後、北への旅を続けた。

①4:3

Joh 4:3 ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた。

- ②最初の計画どおり、ガリラヤに行かれた。

2. 44~45節

Joh 4:44 イエスご自身、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言なさっていた。

Joh 4:45 それで、ガリラヤに入られたとき、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎したが、それは、イエスが祭りの間にエルサレムで行ったことを、すべて見ていたからであった。彼らもその祭りに行っていたのである。

(1) 「預言者は自分の故郷では尊ばれない」

- ① 共観福音書では、これは格言にさえなっていた。
- ② ここでのイエスの証言は、サムリアとガリラヤを対比させたものである。
 - * サマリア人たちはイエスを信じた。
 - * しかし、ガリラヤのユダヤ人たちには、そのような信仰はなかった。

(2) 「それで」という訳語の問題

- ① 「ウン」は、因果関係ではなく、物事の順番を示している。
- ② 「ところが、どうでしょう」(リビングバイブル)
- ③ このとき、不信仰なガリラヤの人たちがイエスを歓迎した。
- ④ イエスは、静かにガリラヤに入ることを予定していたはずである。

(3) 不信仰なガリラヤの人たちがイエスを歓迎した理由は何か。

- ① 彼らも祭りの間エルサレムに行っていた。
- ② 彼らは、イエスがエルサレムで行ったことをすべて見ていた。
- ③ 彼らは、イエスを預言者(神の子)と認めたわけではなかった。
- ④ 彼らは、イエスがガリラヤでも奇跡を行ってくれることを期待した。
- ⑤ ここには、サムリア人の信仰とユダヤ人の信仰の対比がある。
 - * ガリラヤのユダヤ人たちは、しるしを求めた。
 - * イエスは、信仰のある人にはしるしを行った。

II. 第2のしるし(46~54節)

1. 46節

Joh 4:46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。イエスが水をぶどう酒にされた場所である。さてカペナウムに、ある王室の役人がいて、その息子が病気であった。

(1) イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。

- ① その理由は、書かれていない。
- ② 著者ヨハネの意図は何か。
 - * 読者に第1のしるしを思い出させる。
 - ・ イエスが水をぶどう酒にされた場所である。

*一連のイエスの動きがここで完結することを示す。

(2) カペナウムに、ある王室の役人がいた。

- ①カペナウムが再び登場する。
- ②彼は、王に仕える役人(軍人でも文民でも)である。
- ③ここでの王とは、ヘロデ・アンティパスである。

*厳密には、王でなく領主であるが、民衆は彼を王と考えていた。

- ④この役人は、ユダヤ人であった。
- ⑤ルカ8:3

Luk 8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

*ヘロデの執事クーザと同一人物なのかどうかは、分からない。

- ⑥この人の息子が病気であった。

(3) 第2のしるしの特徴

- ①イエスがいる場所と奇跡が起こる場所が離れている。
- ②カナとカペナウムの距離は、20km強である。

2. 47節

Joh 4:47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところに行った。そして、下って来て息子を癒やして下さるように願った。息子が死にかかっていたのである。

(1) この人は、長距離を移動してイエスのところに来た。

- ①第1のしるしは、母マリアの願いに答えて行われた。
- ②第2のしるしは、瀕死の息子を持つ父の願いに答えて行われる。

(2) この人は、イエスには病を癒やす力があると信じた。

- ①タルムードには、高名なラビの祈りによって癒やされたという事例がある。
- ②この人は、イエスの祈りによって息子は癒やされると信じたのであろう。
- ③この人に、イエスを預言者(神の子)と信じる信仰があったわけではない。
- ④さらに、彼は2つの誤りを犯している。

*イエスにカペナウムまで来てもらわなければ、癒やしは起こらない。

*イエスが到着する前に息子が死んだら、それでおしまいだ。

3. 48節

Joh 4:48 イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じません。」

(1) 「あなたがた」(複数形)

- ①彼の信仰も、ガリラヤ人たちと同じものである。
- ②イエスを「奇跡を行う人」と信じているだけで、それ以上ではない。

(2) 「しるしと不思議」

- ①しるとは「奇跡」であり、不思議はそれを見た人が感じる「驚き」である。
- ②「しるしと不思議」を見ないかぎり、イエスを預言者(神の子)と信じない。
- ③これは叱責であると同時に、彼の信仰を深めることばでもある。

4. 49~50 節

Joh 4:49 王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか子どもが死なないうちに、下って来てください。」

Joh 4:50 イエスは彼に言われた。「行きなさい。あなたの息子は治ります。」その人はイエスが語ったことばを信じて、帰って行った。

(1) 王室の役人は完璧な信仰を示したわけではないが、願いを諦めなかった。

- ①彼は、イエスがカペナウムまで来てくれることが、癒やしの条件だと考えた。
- ②彼は、願い続けた。

(2) イエスの回答

- ①イエスは、彼の願いにそのまま答えることはなかった。
- ②しかし、彼に約束を与えた。
- ③「行きなさい。あなたの息子は治ります」

(3) 王室の役人は、見ないで信じる人のモデルとなった。

- ①彼は、イエスと別れてひとりで帰って行った。
- ②彼は、なんのしるしも求めないで、イエスのことばをそのまま信じた。
- ③彼は、イエスは遠い所からでも息子を癒やせると信じた。
- ④彼は、イエスのもとの来たときより、さらに深い信仰を持って帰って行った。

5. 51~53 節

Joh 4:51 彼が下って行く途中、しもべたちが彼を迎えに来て、彼の息子が治ったことを告げた。

Joh 4:52 子どもが良くなった時刻を尋ねると、彼らは「昨日の第七の時に熱がひきました」と言った。

Joh 4:53 父親は、その時刻が、「あなたの息子は治る」とイエスが言われた時刻だと知り、彼自身も家の者たちもみな信じた。

(1) しもべたちが彼を迎えに来て、朗報をもたらした。

- ①彼の息子が治った。
- ②何時ごろによくなったか。
- ③昨日の第7の時(午後1時)。
- ④徐々に回復したのではなく、瞬時に熱がひいた。

(2) 彼自身も家の者たちもみな信じた。

- ①午後1時は、イエスが彼に約束を与えた時刻である。
- ②彼の信仰は、さらに深まった。
- ③彼の家の者たちもみな信じた。

(3) 信仰の成長

- ①神頼みの信仰(危機に直面して)
- ②確信ある信仰(イエスのことばによって)
- ③証明された信仰(イエスの癒しを経験して)
- ④隣人に影響を与える信仰(彼の家の者たちに伝染して)

6. 54節

Joh 4:54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに来てから、これを第二のしるしとして行われた。

(1) ヨハネは、これを第2のしるしと呼んでいる。

- ①イエスは、ガリラヤやユダヤで、これ以外にも多くの奇跡を行われた。
- ②ヨハネは、イエスのメシア性を証明する「7つのしるし」を選んでいる。
*番号がついているのは、最初の2つだけである。
- ③第1のしるしは、「時間の奇跡」である。
- ④第2のしるしは、「距離の奇跡」である。
- ⑤2つのしるしは、少数の人にしか積極的な影響を与えなかった。
- ⑥最初の2つのしるしで、「inclusio」を作っている。

結論：この「inclusio」が伝えるイエス像

1. カナの婚礼での奇跡

- (1) 時間の奇跡である。
- (2) イエスには、物の質を変える創造力がある。

2. 最初の宮きよめ

(1) イエスには、ユダヤ教の制度にまさる権威がある。

(2) 宮きよめは、イエスのメシア宣言である。

3. ニコデモとの対話

(1) ニコデモは、イエスを神から来られた教師であると認めた。

(2) イエスは、神の国に入るためには新生体験が必要であることを教えた。

4. バプテスマのヨハネの証言

(1) バプテスマのヨハネは、イエスがキリストであることを認めた。

(2) 自分は花婿の友人であると証言した。

5. サマリア人たち体験

(1) サマリアの女は、イエスが全知全能であることを認めた。

(2) サマリア人たちは、イエスが「世の救い主」だと信じた。

6. 王室の役人の体験

(1) 彼は、イエスが癒やし主であることを体験した。

(2) 彼は、イエスにとっては病も距離も問題ではないことを体験した。